



左: 近隣のお年寄りが集まって開かれた「サロン」。開放されたデッキで将棋を指す人々=22日
右上: 今月1日にオープンした「よりあいの森」
右下: 外壁には、賛同者の詩人谷川俊太郎さんがよりあいに贈った詩の一節「いきるだけさ しぬまでは」のラテン語訳が書かれている



土地代は寄付 家具持ち寄り 食事や掃除 ボランティアも

老い見守り見守られ

福岡市城南区の閑静な住宅街に今月、小さな特別養護老人ホーム「よりあいの森」ができる。開いたのは、認知症の高齢者の家庭的ケアの草分け「老人所よりあい」を運営する社会福祉法人。地域の人たちや賛同者を巻き込みながら開設ごとき着け、その後も地域を支え、支えられるユニークな運営が始まっている。

福岡の特養「よりあいの森」

「よりあいの森」は、もともと「第3名老人所よりあい」があつたのと同じ敷地内にできた。建物は市内の特養としては初めての木造。真新しい板張りの床などからスギやヒノキの香りが漂う。延べ約910平方メートルで、定員いっぱいの26人が入所している。22日午後、1階の交流スペースで、近隣に住むお年寄りたちが集まって語らうが「サロン」が開かれた。この日は近隣から70~90代の

助け合い、人間の欲求

老所よりあいは1991年、物忘れの始まつた当時90代の一人の女性の居場所づくりから始まった。住み慣れた土地で暮らすこと理念に、市内の民家3カ所で10人前後の認知症のお年寄りを受け入れてきた。「泊まり」のニーズが高まってきた。でも、よりあいは介護保険を使わない自主事業。通りを見て妊娠したと勘違いしたり、死んだはずの家族がいると思つていたり……。そんな考え方と共に感する

支援者は多く、土地代約1億2千万円は、市民101人の寄付ですべてまかなつた。寄付でまかなえるのは珍しい」と市の担当者。

近所の民生委員宮野みはるさん(65)らが中心メンバーで、以前から同じ敷地内に

あるカフェを借りてサロンを開いてきた。「みなさん

トイレ掃除をするグループ」「トイレの神様くら

う」もある。

れ、きょうは来どらんね」と変化の気つきになるかもしない。よりあいの森は、多くのボランティアに支えられている。富野さんは近隣の女性たちは月1回ずつ交代で食事作りのボランティアに入り、カフェの厨房で職員や地域の人々に家庭料理を用意する。よりあいはこれまで、家庭に居場所がないで炎天下を歩き回っていた近所のお年寄りを老人所に迎え入れたり、立ち退きにあつた人暮らしの人家探しを手伝つたりしてきました。富野さんは「信頼関係を食べながら近況を互いに話したり、デッキに出で将棋を指したり。ゆるやかな時間が過ごした。代表の村瀬孝生さん(50)やスタッフ、入所者の姿もあつた。

ほかにも、そば打ちの愛好家が4回ほどベースで作られた食事を食べて小遣钱を払う「食べるボランティア」になる地元の人もいます。トイレ掃除をするグループで、「面白いね」と言つてくらいました。一昨年度の市の事業者公募で選ばれた。建築費約1億9千万円は国の補助金や借入金、祭りや発行誌の収益などをあてた。備品代を浮かすため、家具や調度品のほとんどは持ち寄りで用意した。下村恵美子事務長(62)は「『よりあい流』なんて言われますが、特別なことはしていない。お年寄りを主体に、その困難を解決する。社会福祉の王道です」と話す。皆で集まり、勉強会を重ね、そんな居場所を自らのできることをし、自分の一員である。おしゃべりをして、助け合う。それが人間の根源の欲求みたいなものなんぢやないでしようか」

そんな老人所での出来事をつづった本も出版し、不思議な共感の輪が広がった。

「通い」を軸にしたよりあいだが、2000年代に入ると、独居老人の増加や地域、家族、介護専門職がともに老いを地域で見守りながら、自宅での暮らしを支え、それでも無理になつたときゆっくり移り住めることはない。お年寄りを主体に、その困難を解決する。社会福祉の王道です」と話す。皆で集まり、勉強会を重ね、そんな居場所を自らのできることをし、自分の一員である。おしゃべりをして、助け合う。それが人間の根源の欲求みたいなものなんぢやないでしようか」

(柴田菜々子)

西発見

京都非公開文化財特別公開
4月29日~5月10日 京都の社寺19カ所



◆西念寺「仏涅槃圖」
祝迦滅滅の様子を描
わり、近年まで「現存

「よりあい」流の特養開設

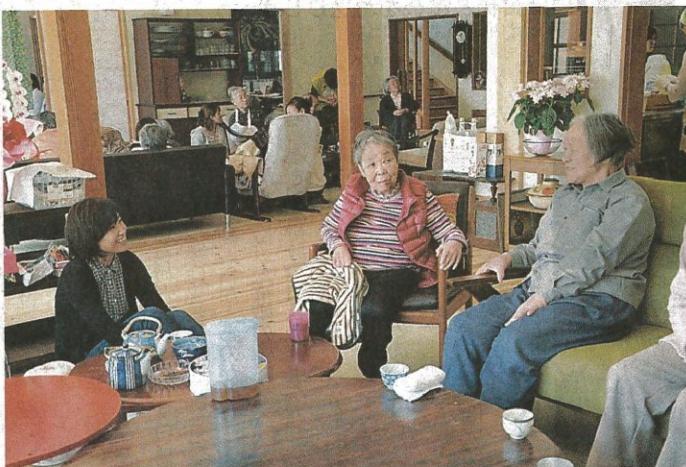
高齢者が住み慣れた自宅や地域で暮らしつづけるためのケアを実践する福岡市の宅老所「よりあい」。国の介護保険制度の枠にとらわれないサービスを提供する「よりあい」が今春、地域密着型特別養護老人ホーム(特養)「よりあいの森」(定員26人)を開設した。従来の特養に象徴された、大規模介護施設の方を問うかのように登場した「よりあい」が今なぜ、特養なのか。開設したばかりの「よりあいの森」を訪ねた。

(井上真由美)

入所型の高齢者介護施設では珍しい木造2階建て。支援者などから寄せられたという使い込まれた中古のソファやテーブルが温かな雰囲気を醸し出す。全室個室。現在、70歳未満の木々に囲まれた福岡市城南区別府の住宅街の一角に、よりあいの森は新築された。支援者などから寄せられたという使い込まれた中古のソファやテーブルが温かな雰囲気を醸し出す。全室個室。現在、70歳未満の木々に囲まれた福岡市城南区別府の住宅街の一

宅老所「よりあい」は1991年、福岡市中央区の寺の一角で、92歳の独居女性の居場所をつくるため、始まった。認知症の高齢者の行き場はなく、介護する家族が疲弊していく中、行き場のない高齢者の居場所として浸透した。現在、福岡市内3カ所でデイサービス(通所介護施設)を運営している。自宅で暮らし続けることを目的に、高齢者本位のケアを実践している。

福岡市 木造2階建て、カフェとも連動



「よりあいの森」の交流スペースでくつろぐ入居者たち

ここ数年、デイサービスを利用者の「泊まり」が増えた。よりあいではデイサービスの延長の「ナイトケア」と位置づけ、介護保険を利用しない自主事業で提供してきた。よりあいの森施設長の村瀬孝生さん(50)は、「利用に上限がある介護保険に泊まりが組み込まれると、デイサービスの利用が制限され、緊急時にも抱えたひずみが表れた」と村瀬さんは語る。今後も

対応できない」と、あえて「泊まり」が増えるのは歴史的な事としての受け入れを続けてきた。次第に職員の負担は重く、と位置づけ、介護保険を利用しない自主事業で提供してきた。よりあいの森施設長の村瀬孝生さん(50)は、「利用に上限がある介護保険に泊まりが組み込まれると、デイサービスの利用が制限され、緊急時にも抱えたひずみが表れた」と村瀬さんは語る。今後も

然としており、介護保険を利用できるついのすみか」として特養開設に至った。ただ、通常の特養とはひどく、地域の介護力も低下し、も圧迫するようになつた。核家族化と高齢化が進んだ社会が、抱えるべくして抱えたひずみが表れた」と村瀬さんは語る。今後も

約1億7千万円を賄同した市民からの寄付やカンパ、物販売などで賄つた。特養とはいえ、ケアは従来の宅老所「よりあい」と同じ。決まったプログラムはなく、入所者は自宅にいるように思い思ひに過す。職員も入所者に寄り添つてその思いをくみ取る。内部だけでなく、外部も「よりあい」流だ。リビングからラッドテックでつながる先には古民家を利用した「カフェ」。地域住民が集い、多世代が集つ。特養の支援者として通う人に異変があれば、職員が気に掛け、地域住民に見守りなどを働きかける。

「泊まり」が増えるのは歴史的な事としての受け入れを続けてきた。次第に職員の負担は重く、と位置づけ、介護保険を利用しない自主事業で提供してきた。よりあいの森施設長の村瀬孝生さん(50)は、「利用に上限がある介護保険に泊まりが組み込まれると、デイサービスの利用が制限され、緊急時にも抱えたひずみが表れた」と村瀬さんは語る。今後も約1億7千万円を賄同した市民からの寄付やカンパ、物販売などで賄つた。特養とはいえ、ケアは従来の宅老所「よりあい」と同じ。決まったプログラムはなく、入所者は自宅にいるように思い思ひに過す。職員も入所者に寄り添つてその思いをくみ取る。内部だけでなく、外部も「よりあい」流だ。リビングからラッドテックでつながる先には古民家を利用した「カフェ」。地域住民が集い、多世代が集つ。特養の支援者として通う人に異変があれば、職員が気に掛け、地域住民に見守りなどを働きかける。

「地域福祉の拠点」目指す

老人ホームに入らないで済むための老人ホームにしたい」と強調した。

老人ホームに入らないで済むための老人ホームにしたい」と強調した。